



山陽鉄道停車場「尾道駅」(当時、神戸・下関間が通過・大正期)



停車場前道(左が尾道駅、右が尾道市営橋・大正期)



町割り図(「鶴水館」、「待帆荘(尾道ホテル)」の名が見える・昭和初期)



尾道港全景(左中「光明寺」から右上「千光寺」にかけて「表畑」が広がる・大正期)



網の浦(「十六東予丸、尾道一多度津」のスタンブ・昭和初期)

## 暗夜行路と小林マツ

『暗夜行路』の主人公、時任謙作は、「あとがき」でも「大体自分自身」と記しているように志賀直哉そのものと考えられます。

父親との口論がきっかけで東京の家を出た直哉

は、大正元年(1910)11月10日深夜、尾道駅に降り立ち宿(鶴水館)をとります。翌日、光明寺で出会った子供に道案内されて千光寺に向う途中で見かけた三軒長屋を気に入り、東端の部屋を寓居に定めます。四日間の瀬戸内旅行から帰宅すると『時任謙作』(後の『暗夜行路』)の草稿執筆を始めます。

直哉は食事・洗濯の世話を隣の部屋に住む小林太兵衛の妻マツ(当時53歳)に頼みました。マツのことは『暗夜行路』のほか直哉の日記にもしばしば登場します。直哉と親交のあった森信蔵氏(尾道出身の新築地劇団員・故人)が直哉から聞いた話によれば、大正四年(1914)直哉が再度尾道を訪問した時に、マツに手紙を出して尾道ホテル(待帆荘)に呼び出すと「飛ぶようにして喜んでやって来た」そうです。

『暗夜行路』には、向島の造船所の活況ぶりや多度津通いの連絡船が描かれています。当時の尾道は至る所に瓢箪が飾られ、本通り商店街には瓢箪を専門に商う店があった程でした。直哉は瓢箪に興味を持ち、三つ購入します。この光景をもとに、大正二年(1911)短編小説『清兵衛と瓢箪』が読売新聞に発表されました。

大正三年(1914)1月、直哉は尾道が舞台の短編小説『児を盗む話』を『白樺』に発表します。同年5月松江に転居。創作に打ち込む環境が整ったかに見えましたが、夏目漱石に依頼されていた東京朝日新聞の連載小説『時任謙作(暗夜行路)』の構想がまとまらず、直哉は上京後漱石に会って連載辞退の申し出をしています。12月には康子(さだこ)と結婚。

大正十年から十一年(1921-22)にかけて『暗夜行路』前篇を『改造』に発表した後、新潮社より『暗夜行路』前篇が刊行されます。大正十一年(1922)、有島武郎と共に『現代三十三人集』(新潮社)を編集。直哉の作品は『暗夜行路』から『尾の道』を収めています。

直哉から『暗夜行路』がマツの許に送られてきた時の事。マツは、親しい近所のおばあさんに尾道の部分を何度も朗読してもらったということです。『改造』の連載は何度もの中断を経てその後も続き、昭和十二年(1937)3月、『暗夜行路』最終部分を脱稿します。

マツは『暗夜行路』の完成を待つことなく、昭和六年(1931)に亡くなっていますが、小林太兵衛とマツの孫、村上桂造氏(桂馬蒲鉾商店創業者)は、直哉の晩年も上京すると必ず、常盤松の直哉宅へ蒲鉾を届けました。直哉の死後も康子(さだこ)夫人に蒲鉾を届けました。

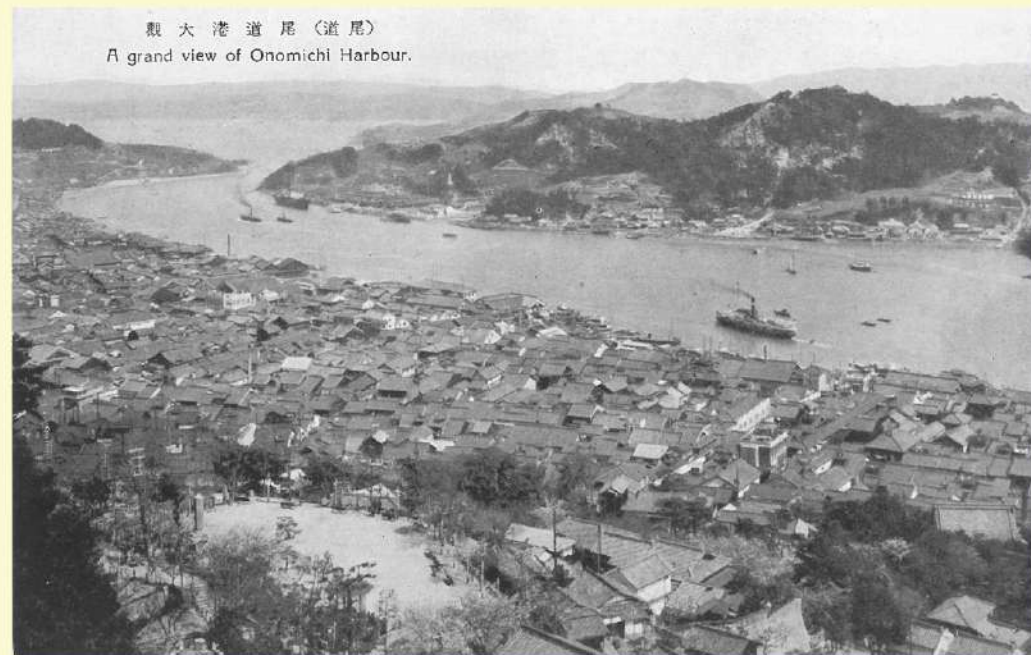
志賀直哉旧居(現在)



# 志賀直哉と尾道

## 文学のまち尾道

古い絵葉書と名物観光ガイドによる尾道文学散歩



観大港道尾(道尾)  
A grand view of Onomichi Harbour.

尾道港大観(暗夜行路に登場する「大阪商船」、「前の島(向島)」の造船所、「石切り場」(岩屋)が見える・大正期)

令和3年(2021)は、志賀直哉没後50年にあたります。

大正元年(1912)、直哉は尾道の美しい風景と出会った人々の優しさに触れ、千光寺山中腹の三軒長屋を寓居と定め、『暗夜行路草稿』の執筆に取りかかりました。

千光寺道にて―「どの家でも軒に絵葉書を入れた額を下げていた」▼ガス屋でストーブ借受をした帰り道―「絵ハカギを買ふ」▼讃岐の金毘羅詣り・参道売店にて―「絵葉書をお買ひやす、本社(金刀比羅宮)でスタンブを押して下さりませ」▼三軒長屋の狭い濡縁に腰かけて世話する婆さんとの会話―「仙酔嶋の絵葉書を見てから、大変好きなんですよ。お婆さんは行つて見た事があるの」―

「暗夜行路草稿」より



盛文堂書店(浪し場付近・昭和12年)

資料提供：尾道市、尾道文学研究会、尾道学文庫、桂馬蒲鉾商店

発行：一般社団法人尾道観光協会 2021.10.21 1000 不詳複製

おのび



# 〔志賀直哉と尾道〕 文学散歩マップ

観光ガイド・高垣俊雄氏作成文(2010.8.28)より

山陽鉄道当時の蒸気機関車(山波海岸)

大正二年(癸丑)の年賀状「瓢箪品評会」の写真



## ①尾道駅

1891(明治24年)山陽鉄道開通。直哉は29才の1912(大正元年)父直温(なおはる)と口論。木挽町の永楽館で2週間滞在後、11.10深夜、尾道駅着。

## ②シネマ尾道

「尾道松竹(1947-2001)」を改装、2008年開館。直哉原作、松竹の渋谷実「正義派(1957)」に「清兵衛と瓢箪」が含まれ、他「赤西蠣太(1936)」・「暗夜行路(1959)」が映画化されている。

## ③旅館鶴水館跡

直哉はここに2泊、貸家探しを済ませた後、瀬戸内へ小旅行、4日目に尾道に戻る。

## ④光明寺山門

謙作が戦争ごっこをしながら坂道をおりてきた男の子に千光寺へ登る道を案内してもらい、貸家札の出ている長屋を二つ見て廻る。(暗夜行路)

## ⑤宝土寺

「児を盗む話」では「金剛寺」の名で「暗夜行路」では「宝土寺」のままだ。

## ⑥宝土寺下の「岩兵衛按摩」跡

謙作は隣のマツ婆さんの紹介で「岩兵衛按摩」に行く。(暗夜行路)  
(その子娘を盗んで帰ることを、空想を交えて書いたのが「児を盗む話」)

## ⑦志賀直哉旧居

「暗夜行路」碑は犬養健(1896-1960)の筆。三軒棟刺長屋の東端、六畳・三畳の二間と台所のある土間で便所は共用。隣の小林太兵衛の後妻で親切なマツ(53才)に食事・洗濯など頼んだ。家賃2円。直哉はここに大正元年11月から翌年まで滞在したが、旅行したり2度目の東京帰りで交通事故に遭い入院、城崎温泉に約3週間滞在中、尾道の借家住まいは3〜4ヶ月だった。直哉は尾道で二番のガス使用者だった。寓居を引き払った後、直哉は二度尾道を訪問している。滞在先を知らせるとホテルにマツはほうれん草などを持って飛んでやって来たという。直哉は折りあるごとにマツに金品を送った。「暗夜行路」(前編)が送られると親しい近所のおばあさんに尾道の部分を何度も朗読してもらった。太兵衛の没後、直哉はマツに上京を勧めたがマツは辞退。マツは71才で三原の甥に引き取られ、昭和6年6月23日没、戒名は松室壽貞信女。マツの墓所は三原市極楽寺にある。



「尾道港(南島)」ドック入りした汽船や客船が見える(大正期)

浄土寺山からの眺望(大正期)

尾道は平安時代末(1169)に開かれた港町で、天然の良港として栄え、江戸時代には田能村竹田、菅茶山、頼山陽など多くの文人墨客が訪れた。



小林マツと志賀直哉旧居(昭和40年撮影)  
写真提供 桂馬蒲鉾商店、志賀直哉氏

## ⑧帆雨亭

出雲屋敷の一角。「おのみち文庫志賀直哉コーナー」が開設された。(2001.11.2)

## ⑨千光寺公園(旧)

謙作は茶屋の床几から景色を見た。百貫島(愛媛県)・向島の石切り場跡・造船所が見える。謙作が見た向島の塩田はもうない。(暗夜行路)

## ⑩千光寺

当時は一時間毎に時の鐘を打っていた(今は午後六時だけ)。(暗夜行路) 1920(大正9)直哉は再会したマツと千光寺で写真を撮る。

## ⑪文学のこみち

巨岩に「暗夜行路」の一節が刻まれている。志賀直哉と40年の親交のあった小林和作筆。

## ⑫西国寺

謙作が讃岐行きの船から見る。「西国一」といわれる大寺。(暗夜行路)

## ⑬浄土寺

謙作が西国寺の東に船から見る、尾道随一の名刹。映画豊田四郎「暗夜行路(1959)」・小津安二郎「東京物語(1953)」で撮影されている。

## ⑭料亭「竹村屋」と「蠣船料理」

直哉がガス消費2番の時、1番は竹村屋(映画「東京物語」のロケで監督や俳優が泊まった宿)。その西隣が蠣船料理(船を繋留して蠣料理が出される)。謙作は蠣から出た真珠に幸福を感じ妹の咲子に送る。(暗夜行路)

## ⑮借家座跡

幕末の町絵図には「芝居小屋」と出ている。ある晩、謙作は隣の老夫婦と芝居を見に行くつもりだったが、老夫婦の孫娘が来た為、一人で「盛綱」を観る。(暗夜行路)

## ⑯尾道映画資料館

一階の尾道ロケスチル写真展示の中に豊田四郎「暗夜行路」(主人公池辺良・山本富士子)、小津安二郎資料に志賀直哉と小津安二郎のスチル写真が展示されている。

## ⑰桂馬蒲鉾商店

大正二年創業。小林太兵衛と先妻との間の孫村上桂造がこの店の創業者。直哉の晩年、桂造は上京すると必ず尾道弁丸出しの大声で常盤松の直哉宅へ蒲鉾を届けた。直哉は「暗夜行路」前編や常盤松で撮影した写真を贈る。直哉の死後も桂造は康子(さだこ)夫人に蒲鉾を届けた。

## ⑱藤原茶舗

大正二年創業。当時の店の名を「瓢箪屋」といい、店の軒先に瓢箪を吊るして売っていた。

## ⑲商業会議所記念館

尾道市重要文化財。志賀直哉没後50年追悼談話会と特別展示が行われる。(2021.10.23)



藤原茶舗

尾道市土堂1-1-13  
TEL.0848-25-2836

店主

藤原 唯恭さん



桂馬蒲鉾商店

尾道市土堂1-9-3  
TEL.0848-25-2490

三代目女将

村上 芳子さん



文学のこみち「暗夜行路」石碑

「暗夜行路」前編(大正11年)



志賀直哉旧居「暗夜行路」石碑

犬養健(たける・犬養毅の三男)の筆。  
白樺派の同人で小説家。「暗夜行路」前編の装丁を手掛けた。後に政界に転じ、吉田茂内閣の法務大臣に就任した。

小説『暗夜行路』に登場する「隣の親切な婆さん」と小林マツは、私の祖父である桂馬蒲鉾商店初代、村上桂造の祖母です。小林マツは、志賀先生の尾道暮らしの中、慣れない自炊に苦勞される志賀先生をお隣から甲斐甲斐しくお世話をしていました。村上桂造は時折、祖母マツのところへ遊びに行つては、志賀先生のお部屋にもお邪魔しておりました。この出会いが、志賀先生と大正二年に創業する桂馬蒲鉾のご縁の始まりでした。以来桂造は、常盤松の志賀邸へ自ら蒲鉾包みを両手にたずさへ上京し、度々お届けにあがりました。喜ばれた志賀先生からは、写真や書籍を頂戴し、長くご縁を紡ぎました。

志賀先生と桂馬初代の祖母マツに始まるご縁を大切に、現在もお客様との出会いとご縁を感謝の気持ちで紡ぎ108年の蒲鉾作りに励んでおります。1994年4月30日、志賀先生のご子息直吉ご夫妻、畏友でいらっしゃる阿川弘之先生ご夫妻には、三原市極楽寺にあります小林マツの墓にお参りいただきました事を伺い、大変感銘いたしました。